

淀川水系木津川でチャネルキャットフィッシュが繁殖しているかもしれない

○北野大輔(滋賀県大院・環境, 木津川グループ河川レンジャー)

小林慧人(京大院・農, 木津川グループ河川レンジャー)

チャネルキャットフィッシュ (*Ictalurus punctatus*) は北米原産の淡水魚であり、1971年以降複数回にわたり養殖を目的に日本に持ち込まれた。茨城県霞ケ浦においては、漁業における大量の混獲や漁獲物と漁具の損傷、漁業者の怪我、有用水産資源の食害などといった問題が本種によってもたらされているため、現在、本種は外来生物法において特定外来生物に指定されている。

琵琶湖・淀川水系においても、チャネルキャットフィッシュの個体数の増加が懸念されており、上流域の琵琶湖や瀬田川では個体数が急増している。下流域の淀川水系では、淀川本流において2012年以降に成魚が捕獲されている。

淀川水系の木津川においては、2010年に当歳魚1個体と成魚3個体が、2012年に当歳魚1個体が捕獲されているが、2012年以降に本種を採集した例は報告されていない。ただし、木津川上流部につながる布目ダムには本種が多数生息している。しかし、2018年8月18日に木津川（木津川と宇治川が合流する地点から約2km上流の左岸）で開催された生物観察会において、チャネルキャットフィッシュの小型個体を5個体採集した（図1）。採集方法はタモ網であり、岸際の植物のかげで採集した。採集した本種の標準体長は50mm、55mm、57mm、62mm、64mmであり、全て当歳魚であった可能性が高い。

チャネルキャットフィッシュの木津川下流部への侵入経緯として、(1)上流域の生息地（琵琶湖流域もしくは布目ダム）から当歳魚が流下した、(2)淀川水系に流下した成魚が採集地周辺で自然繁殖した、の2点が挙げられる。本調査では複数の小型個体を同じ地点で採集したことから、採集地周辺において本種が自然繁殖している可能性が高い。

淀川水系においてチャネルキャットフィッシュが定着しているという報告はない。しかし、近年、成魚の採集例が増加している中、本調査で若魚が複数採集されたことから、リスク管理の観点から定着していると考えするのが妥当だろう。すでに定着している他水系と同様に、今後、個体数が増加することが強く懸念される。淀川水系への分布拡大を防止するためには、定期的なモニタリングによって侵入を早期に発見することが重要となるだろう。また、採集を行った生物観察会では、本種を在来種であるギギ (*Tachysurus nudiceps*) と判別した参加者がいた。したがって、木津川流域では本種に対する認知度がまだあまり高くないことが考えられるため、周辺住民に対して本種についての啓発を行うことが、本種のさらなる侵入の早期発見につながるかもしれない。

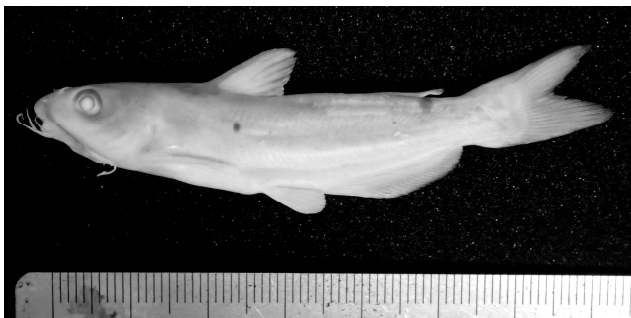


図1. 採集したチャネルキャットフィッシュ。